

遊びの変容からみる中山間地域の暮らしに関する研究

一奈良県宇陀郡曾爾村を対象として一

The change of children's play and the life in village of mountain area

05-04657 大迫弘尚 Hiroataka Oosako
指導教官 土肥真人 Adviser Masato Dohi

1章：研究の概要

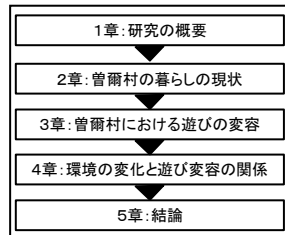
1-1 研究の背景と目的

現在中山間地域では農林業の衰退、伝統行事の継続困難、農地や山林の荒廃など様々な問題が起こっている。しかしながらその一方で道路整備などから市街地への便が良くなり、地域に頼らなくても仕事や買い物が容易にできるようになった。このことは中山間地域の暮らしが便利になってきたとも捉えられるが、その地域で暮らす意義を見失わせてもいる。

そこで本研究では中山間地域の暮らしや空間を維持するための方法を遊びの変容とその背景から考えていく。遊びは中山間地域の空間全てを対象とし、それらの空間は産業や交通、伝統行事、観光などと密接に関係していると考えられる。遊びの既往研究としては都市の遊び空間の変化をみたもの¹⁾や遊びの機能について述べたもの²⁾などがある。

1-2 論文構成と方法

本論の各章の関係と論文構成を【図1】に示す。第2章で本研究の対象地である奈良県宇陀郡曾爾村の概要と暮らしの実態を地方史誌などから把握する。第3章では、曾爾村の遊びの変容をWS形式によるヒアリング調査から明らかにし、そして第4章では、曾爾村内外の環境変化を空間と社会的な変化として分析し、さらに第3章とクロス分析することにより遊びの変容の背景、中山間地域の暮らしの意義について述べる。



【図1】論文構成

2章：曾爾村の暮らしの現状

2-1 曾爾村の概要

曾爾村は、奈良県の東北端に位置し、村の周囲を山々に囲まれている中山間地域である。人口は1960年の4433人から現在は1949人となり、過疎高齢化が深刻な問題となっている。

2-2 曾爾村における暮らしの現状

曾爾村における総就業人口のうち第1次産業の就業人口比率は1965年から著しく低下し、第2次産業も1985年から低下している。しかしながら曾爾村はすずきが原である曾爾高原、天然温泉であるお亀の湯など観光資源や観光施設が豊富にあり第3次産業は増加傾向にある。また観光客は1965年から増加しはじめ現在では年間45万人も訪れている。交通に関してはここ15年でバイパスなどの道路整備が頻繁に行われ、市街地へのアクセスが20分以上も短縮された。また15歳から39歳までの若い世代における村外への通勤・通学率は高く、その世代における通勤通学人口の60.1%を占めている。

3章：曾爾村における遊びの変容

3-1 調査概要

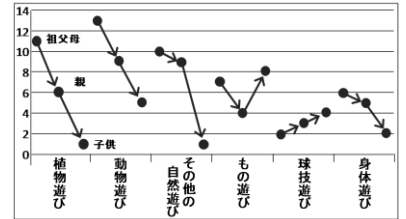
奈良県定住促進事業の一環として曾爾村住民ワークショップを行った。ワークショップでは3世代176名に「村の現状

と課題」、「遊んだ場所と内容」などを調査した。ここでは「遊んだ場所と内容」を用いて分析を進める。

3-2 遊び内容の変容

曾爾村の遊びは全部で75種類確認された。祖父母世代は49種類、親世代は36種類、子供世代は22種類の遊びがあり、遊びの種類が減少していることがわかる。

性質で遊びを分類したところ、キノコとりや山菜とりなどの「植物遊び」、昆虫採取や魚釣りなどの「動物遊び」は祖父母世代から子供世代にかけて一定して種類が減少しており、山登りやそり遊びなどの「その他の自然遊び」、かけっこなどの「身体遊び」は親世代から子供世代にかけて急激に減少している。逆に増加しているものとしては、野球やサッカーなどの「球技遊び」が一定して増加している。おはじきやゲームなどの「もの遊び」は親世代で減少し、子供世代で増加している【図2】。

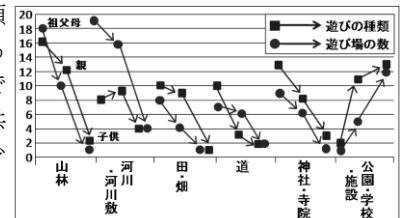


【図2】遊び種類の世代変化

3-3 遊び空間の変容

曾爾村の遊び場を【図4a】に示し、空間別に遊び場の数と遊びの種類を【図3】にまとめた。遊び場の数が一定して減少しているものは「山林」「田・畑」「神社・寺院」の遊び場であり、一定して増加しているものは「公園・学校・施設」である。「河川・河川敷」「道」に関しては親世代から子供世代にかけて急激に減少している。またそれぞれの空間の傾向を比較すると、「山林」における遊びの種類、遊び場の数が他の空間に比べ急激に減少していることが分かる。

空間別の遊びの種類数をみると祖父母世代から親世代にかけて急激に減少しているのは「道」の遊び、急激に増加しているのは「公園、学校、施設」の遊びである。祖父母世代から子供世代にかけて種類が一定して減少しているものが「神社・寺院」での遊び、親世代から子供世代にかけて急激に減少しているものが「山林」「河川・河川敷」「田・畑」での遊びである。



【図3】遊び空間の世代変化

4章：環境の変化と遊び変容の関係

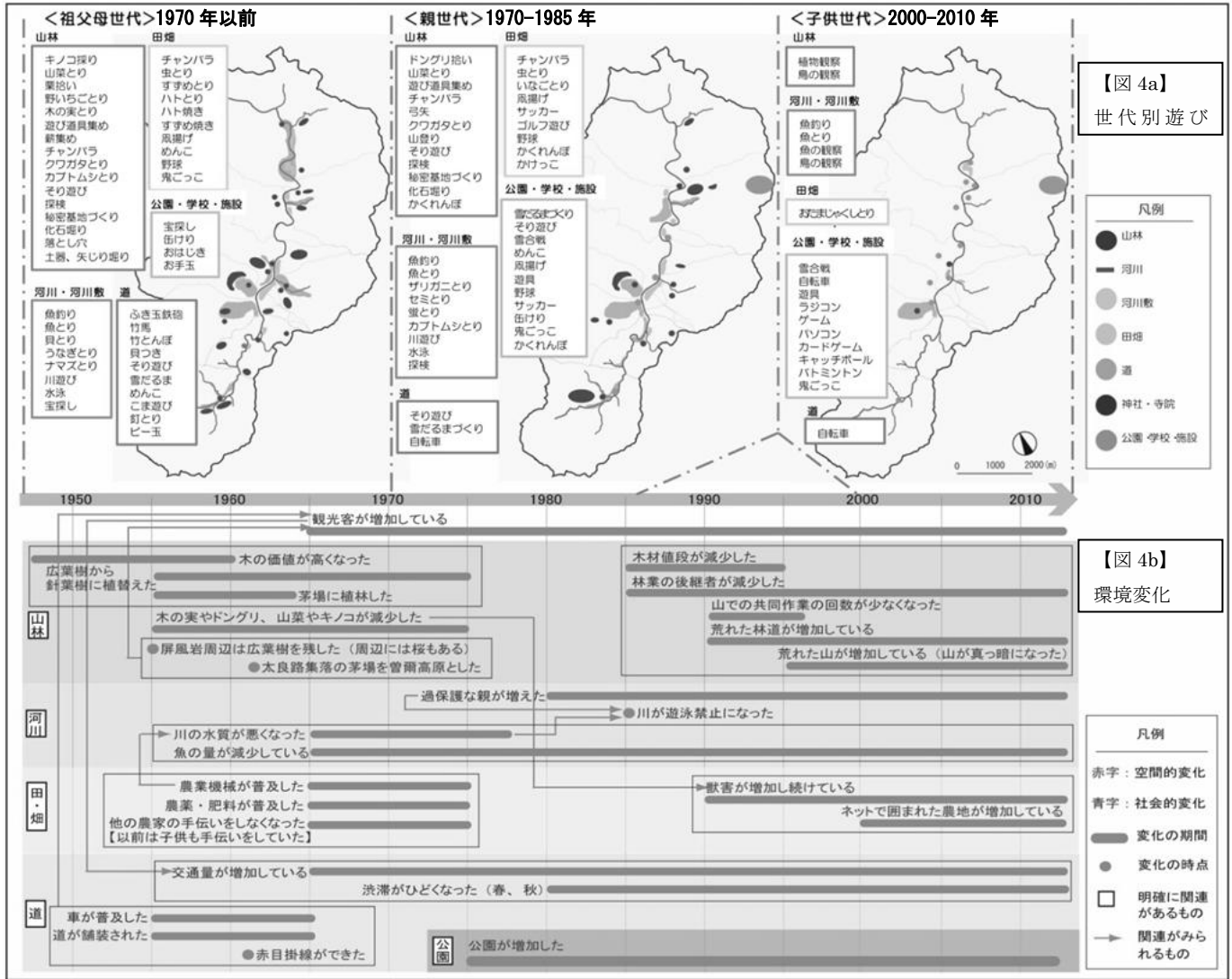
4-1 調査概要

前章の調査概要で述べた「村の現状と課題」の中から村の環境変化に関するものを抜き出した。調査で得られた意見は911件あり、変化に関するものは288件であった。重複するものを除き、整理すると79件の意見が得られた。

4-2 空間変化と社会変化

79件のデータのうち空間変化に関するものは42件、社会変化に関するものは37件であった。【図4b】は主な意見を時系列で並べその関係性について示している。

「山林」に関する変化を見てみると1955年から1975年にかけて大規模植林をし、それと関係して木の実や山菜、キノコなどが減少した。また「田・畑」では1990年から獣害が増加し、その対策としてネットで囲まれた農地が増加しているが、これらの背景には山の食物が減少したことが挙げられる。このように空間は他の空間と関係があり、空間における変化



がそこだけで閉じているものは少ない。また空間変化と社会変化に着目してみると、まず社会変化が起こり、それと関係して空間変化が起こっている傾向にある。

4-3 遊び変容の背景

各世代における子供時代は祖父母世代が1970年以前、親世代が1970-1985年、子供世代が2000-2010年である(子供時代を5-15歳とした)。

【図3】【図4a】と【図4b】を祖父母世代から親世代の変化の時期である1955年から1980年、親世代から子供世代の変化の時期である1980年から2005年において照らし合わせる。まず「山林」について見ると「他の空間に比べ遊び種類と遊び場の減少が著しい」ことは、1950年から遊びの対象となるドングリや木の実などが減少したことと、1995年から真っ暗になるほど荒れた山が増加していることが背景として挙げられる。「河川・河川敷」において「遊び種類と遊び場が著しく減少している」のは川が遊泳禁止になったことが影響しており、「田・畑」において「祖父母世代から親世代で遊び場が遊びの種類に比べ減少している」のは農地の手伝いをしなくなり、農地に接する機会が減少したことが要因となっており、また「親世代から子供世代にかけて遊びの種類が著しく減少している」ことは、ネットで囲まれた農地が増加し、そもそも農地に入れなくなってしまったことと関係する。「道」において「祖父母世代から親世代にかけて遊びの種類は激減しているが、遊び場は微減している」ことは親世代が雪に関係する遊びをしていることと1955年から車が普及したこと

が背景として挙げられ、車の普及により道が遊び場でなくなり、雪が降ったときだけ車が通らず遊び場に戻ることが推測される。「公園・学校・施設」において「遊び場が親世代から子供世代にかけて激増した」ことは1975年から公園が増加したことの影響である。

4-4 村内環境と遊びの関係

「山林」「河川・河川敷」「田・畑」における遊びの変容の背景には山の荒廃、川の水質悪化、獣害の増加など暮らしにおいて悪い影響を及ぼしているものが多い。一方「道」「公園・学校・施設」における変容の背景には暮らしにおける影響が少ない。つまり中山間地域特有の空間に関する遊びの変容は暮らしの変化と相互に関係し、道や公園などの変化は中山間地域における暮らしとは切り離されている。今後中山間地域において何らかの変化を起こすときには遊びが復活するように考えると多様な社会や空間がつけられるとともに暮らしの保存にも繋がっていく。

5章：結論

本研究により以下のことが明らかになった。

- ①遊びの種類は世代が若くなるにつれ減少しているが特に自然に関する遊びが減少している。
- ②1つの空間における変化は他の空間にも影響を与えているものが多い。
- ③中山間地域特有の遊びの変容は様々な暮らしの変化と相互に関係する。

【補注】

- 1) 仙田満(1984)「都市化によるあそび空間の変化の研究」都市計画 126号 pp. 87-92
- 2) 木下勇(1993)「三世代への聞き取りによる農村的自然の教育的機能とその変容」日本建築学会計画系論文報告集第455号 pp. 83-92